様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２１年　５月１２日現在

研究種目：基盤研究（Ａ）
研究期間：2006～2009
課題番号：18251004
研究課題名（和文）　９・１１後のイスラーム世界におけるイスラームフォビア意識の浸透に関する研究
研究課題名（英文）　Studies on the Spread of Muslim Awareness of ‘Islamphobia’ after September 11

研究代表者
飯塚　正人（IIZUKA MASATO）
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：90242073

研究分野：イスラーム学・中東地域研究
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：国際研究者交流、多国籍、イスラームフォビア、アルカーイダ、ジハード、テロ、レジスタンス、自衛

１．研究計画の概要

本研究は、2001 年 9 月 11 日の米国同時多発テロ事件以降、米国主導で進んできた「テロとの戦い」が、開戦から数年を経ていよいよ“文明の衝突”と呼ぶにふさわしい深刻極まりない様相を呈しつつある状況に鑑み、多くのムスリム（イスラーム教徒）の同胞意識を高める一方で、彼らの一部を自発的な武装闘争（「テロ」）にも駆り立ててきた／いる、ほとんど唯一の要因である「イスラームフォビア（ISLAMOPHOBIA または ISLAMAPHOBIA：ムスリムへの迫害・攻撃）」意識の広範な浸透の実態とその要因について、また「イスラームフォビア」として認識される具体的な事例は何か、を地域毎の現地調査を通じて明らかにすることを目的としている。

２．研究の進捗状況

研究目的を達するために、初年度は EU、二年度目は中東、三年度目はオーストラリアを含む東南アジアを重点調査地に設定し、現地のムスリム諸団体や個人に対するインタビューと出版物の収集・分析を行ってきた。同時に、4 年間の研究期間内で「イスラームフォビア」意識の浸透度を定点観測し、浸透度が変化する原因をも明らかにすべく、それぞれの地域での現地調査も継続している。こうした調査の結果、まず初年度に明らかになったのは、欧米在住のムスリムが自国内で差別・迫害されているという意識を持つ度合いは、居住国によって大きく異なるものの、米国のイラク占領、イスラエルのパレスチナ占領を「イスラームフォビア」と認識している点では変わりがなく、2006 年夏のイスラエル軍によるレバノン攻撃を経て「イスラームフォビア」意識はいよいよ深く確実に浸透しつつあるという事実であった。また、続く中東と東南アジアの調査でも、同じく国や地方によって程度の違いはあるものの、一般にスンナ派住民の多くがアルカーイダ思想（ムスリムは攻撃されており、自衛のためにジハード＝テロが必要であると説く）に通じる一定のイスラームフォビア意識を抱いており、それゆえアルカーイダを含むジハード団体をテロリストというよりはレジスタンスと見ていること、また先のレバノン攻撃に加え、2008 年末から 1 か月続いたイスラエル軍のガザ攻撃が人々の間にいっそう強固なイスラームフォビア意識と怒りを産み出している事実が明らかになっている。さらに、2006 年夏以降シーア派の「イスラームフォビア」意識が深まるなかで、対イスラエル戦の主役となったヒズブッラーがシーア派のなかで突出した人気を博しつつある事実も明らかになった。総じてこれまでのところ、世界に広がるムスリムの「イスラームフォビア」意識が弱まる兆しはほとんど見られない。

３．現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している

（理由）当初計画では、9・11 以降の米国の状況に鑑み、現地調査の実施がさまざまな軋轢を引き起こす危険を考慮して、米国在住ムスリムを調査対象から除外していたが、同国での政権交代ムードが高まるなか、2008 年夏には小規模ながら米国での調査を行うことができた。また、2006 年 6 月にカナダ・トロントで地元出身のムスリム青年グループ

による反政府テロ計画が摘発された際、欧米諸国では初めて、カナダ当局がこれら青年とアルカーイダとの接触を明確に否定し、アルカーイダ思想に共鳴した青年たちが自発的に計画したテロであると発表したのを受けて、同年夏にはカナダで効果的な緊急現地調査を実施できている。さらに 2009 年初頭には、イスラエルと軍事同盟関係にありながら、同国のガザ攻撃後、突如大規模な反イスラエル・デモが起きたトルコでも現地緊急調査を実施できるなど、調査地の環境変化や「テロリスト」の実態解明が進んだこと、また多くのムスリムが「イスラームフォビア」と認識するような軍事行動が突如勃発したことにより、一部で予想以上に効果的な調査を実施することができたため。

４．今後の研究の推進方策

最終年度となる 2009 年度は南アジア三国（インド、パキスタン、バングラデシュ）を重点調査地とする。これまでと同様、「イスラームフォビア」意識の浸透度、またこうした意識を浸透させた要因、さらに「イスラームフォビア」として認知されている具体的な事例を明らかにすべく、現地のムスリム諸団体や個人へのインタビューと出版物の収集・分析を行う。また南アジア三国と密接な関係を持つアフガニスタンにおける「イスラームフォビア」意識の浸透についても、文献による調査を実施する。同時に、4 年の研究期間内で「イスラームフォビア」意識の浸透度を定点観測し、浸透度が変化する原因をもさらに明らかにすべく、欧米、中東、東南アジアでの現地調査も継続する。なお、現地調査の終了後には、国内で調査報告を兼ねた共同研究会を開催し、研究成果の最終的な公開に向けて、比較・統合・理論化のための議論を重ねる。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４２件）

①「SAKAI KEIKO, “‘Stories of our boys’, but for whom? The Japanese media’s coverage of the SDF in Iraq”, *International Journal of Contemporary Iraqi Studies*, vol.1-3, pp.349－366, 2007, 査読有

②「. 山岸智子、「テロ討伐と女性像(イメージ)―― 中東研究の立場から」、『国際法・国際関係とジェンダー』(東北大学出版会)、pp.299-312、2007 年、査読無

③ TOKORO IKUYA, “Border Crossing and Politics of Religion in Sulu”, *Militant Islam in Southeast Asia (Asian Cultural Studies)*, vol.15(Special Issue), pp.121-136, 2006, 査読無

④中田考、「幻想の自由と偶像破壊の神話」（特集　イスラームと世界　衝突か抵抗か）、『現代思想』、34-6（激動するイスラーム）、pp.168-187、2006 年、査読無

〔学会発表〕（計１０件）

〔図書〕（計７件）

①「黒木英充(編）、東信堂、『「対テロ戦争」の時代の平和構築－過去からの視点、未来への展望』、2008 年、188+11pp.

② 飯塚正人、山川出版社、『現代イスラーム思想の源流』、2008 年、90pp.